

## 史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、二〇〇五年度より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその一六冊目に当たる。前号までに、東京感化院時代の日誌類全四一冊の翻刻、ならびに同時期の規則類の翻刻は一通り完了した。そこで、それらに次いで重要度が高いと考えられる院報類の翻刻を本号よりおこなうものである。

本号の翻刻・編集・版下作成は筆者の担当になるものである。史料の入力に当っては、菊池結（大正大学大学院）、森田伸雅（同研究生）の両氏にご協力いただいた。また、校正に際しては、菅田理一（当研究所嘱託研究員、淑徳大学非常勤講師）にご協力いただいた。ここに記して心より御礼申し上げる。

\*

東京感化院では、東京感化院慈善会会員を主たる読者対象とした院報を一八九三年（明治二十六）より刊行し始めている。最初は、一八九三年七月一六日に発行された『感化志叢』第一号（成田山仏教図書館所蔵）である。表紙、裏表紙、本文二二頁、折込図（東京感化院現在の図）より成り、発行兼編輯者は高瀬恭介（高瀬真卿の長男）

のち紹卿と改名)、発行所は東京感化院主教部(東京本郷区曙町十六番地)である。参考までに、以下に目次を掲げておく(括弧内は頁数)。

●感化教(一)

○感化教の祭神(一)、○克化殿の体裁(二)、○克化殿の名(三)、○少年の父母について(四)、○修身教授につきて(五)、○不良の遺伝につきて(六)、○仏蘭西メットライ感化院概況(六)

●家庭のしるべ(九)

●雑事(一二)

●院中行事(一三)

○賞罰会(一四)

●故家族長Y和卿伝(一六)

●東京感化院慈善会録事(一八)

○本会沿革、○御沙汰、○露国皇太子御寄付、○講堂新築資、○御料地、○本年一月以来寄付金及入会員、○慈善会役員(二〇)、○慈善会会員(二〇)、○特別終身会員(二二)、○終身会員(二二)

なお、この『感化志叢』は第二号まで発行されたと考えられるが、第二号は現在のところ所在不明であり、確認はできていない。

次に、一八九四年(明治二十七)二月一八日より、『東京感化院雑記』の刊行が始まっている。国立国会図書館に所蔵されるバックナンバーを以下に掲げておく。

第一号、本文二二頁、一八九四年（明治二十七）二月一八日、発行兼編輯者高瀬恭介、発行所東京感化院院司  
第二号、本文二二頁、一八九四年（明治二十七）六月一七日、（以下同右）

第三号、本文二〇頁、一八九四年（明治二十七）一〇月三日

第四号、本文二八頁、一八九五年（明治二十八）四月二〇日

第五号、本文三四頁、一八九五年（明治二十八）二月二一日

第六号、本文三二頁、一八九六年（明治二十九）五月一七日

第七号、本文二二頁、一八九六年（明治二十九）一月三〇日

第八号、本文二八頁、一八九七年（明治三十）六月七日

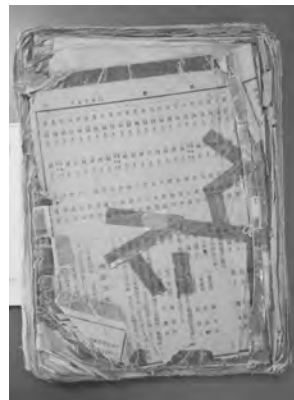
第九号、本文三七頁、一八九七年（明治三十）一月三日

第一〇号、本文二六頁、一八九八年（明治三十一）二月五日

第一一号、本文二六頁、一八九八年（明治三十一）五月一〇日

『東京感化院雑記』の最終号は不明であるが、以上のように少なくとも第一一号までの刊行は確認できる。内容については、既に言及したことがあるので、ここでは省略する。

この『東京感化院雑記』第一一号が刊行されてから、一年近くを経た一八九九年（明治三十二）四月二五日に、本号で掲載する『東京感化院月報』第一号が刊行された。本誌は「月報」と銘打たれているが、当初は予定通りに刊行できなかったようである。第二号は所在不明のため確認できないが、第三号の発行は、一九〇一年（明治三十四）五月二五日である。最終号は不明であるが、第六六号までの刊行は確認でき、そのうち五五冊が錦華学院に保管されている。本号では、第一号から第三一号までのうち、所在不明の八冊（第二、七、八、一二、一三、一六、一七、二九の各号）を除く二三冊分の翻刻を掲載した。なお、第一号の一〜二頁は欠けており、所在不明で



調査当時の史料の外観

35	105	1904 (明治37) 年9月10日	清水橋村「梧窓小観」
36	106	1904 (明治37) 年10月10日	清水橋村「萩窓小言」、「慈善書画抽籤会報告」
37	107	1904 (明治37) 年11月10日	清水橋村「不良児童研究案(一)」、楓堂「片々録」
38	108	1904 (明治37) 年12月10日	高瀬紹卿「HSの研究に就て」、みをつくし「櫻国氏の慈善を読む(備作恵済会報)」
39	109	1905 (明治38) 年1月10日	「新年の辞」、清水橋村「不良児童研究案(二)」、山村「慈善団体と生産的事業」
40	110	1905 (明治38) 年2月10日	高瀬紹卿「再びH生の研究に就て」
41	111	1905 (明治38) 年3月10日	清水橋村「感化事業に就て一雑誌『弘道』記者の説を読む」
42	112	1905 (明治38) 年4月10日	高瀬紹卿「公立と私立(感化事業)」、枳花「雜観」
43	113	1905 (明治38) 年6月10日	湯本武比吉「家族の責任」
44	114	1905 (明治38) 年7月10日	「HSの研究」
45	115	1905 (明治38) 年9月10日	清水橋村「社会と不良少年(一)」、「HSの研究(続)」
46	116	1905 (明治38) 年11月10日	清水橋村「社会と不良少年(二)」、「HSの研究(続)」、「井頭学校開校式」
47	117	1905 (明治38) 年12月10日	清水橋村「盗心」、「HSの研究(続)」
48	118	1906 (明治39) 年1月10日	「新年の辞」、清水橋村「不良少年と感化院」「盗心」
49			
50	119	1906 (明治39) 年4月10日	楓堂「奮起せよ教育家」、高瀬真卿「心の掃除」、「不良少年の感化(洲本に於ける懲治場)」(大阪毎日)、院末生「雑感雜記」
51	120	1906 (明治39) 年5月10日	楓堂「国家経済の上より見たる感化事業」、「家庭学校と称すべき模範監獄(小田原在の幼年監)」、家塾生「九楽府の初夏」、院生「エハガキ展覧会」
52			
53	121	1906 (明治39) 年8月10日	楓堂「宗教と感化事業」
54	122	1906 (明治39) 年10月10日	清水橋村「不良児童研究私案(三)」「感化事業所感」、「外面より見たる本院(電報新聞所載、中央新聞所載)」
55	123	1906 (明治39) 年12月10日	「東京感化院分院家庭農業苑設置」、清水橋村「不良児童研究私案(四)」、「東京感化院慈善会絵画抽籤会に就て」
56	124	1907 (明治40) 年1月10日	「東京感化院静岡分院家庭農業苑の開設」、「外面より観たる東京感化院」
57	125	1907 (明治40) 年2月10日	「東京感化院静岡分院家庭農業苑の開設」、「東京感化院静岡分院家庭農業苑入院規則」、「小学科課定表」、「静岡分院開院式」、「東京感化院慈善会収支決算報告」
58	126	1907 (明治40) 年4月10日	「東京感化院静岡分院家庭農業苑入院規則」、院末生「女子感化院を建てる者はなき乎」、「外面より見たる東京感化院」
59	127	1907 (明治40) 年6月10日	「東京感化院静岡分院家庭農業苑入院規則」、「感化教育と農業施設(地方感化教育家の設備を促す)」
60	128	1907 (明治40) 年8月10日	「東京感化院案内」、楓堂「慈善事業と養鶏」
61	129	1907 (明治40) 年10月10日	「東京感化院沿革」、「第二回絵画抽籤会」、靖則生「十五日の記」
62	130	1908 (明治41) 年3月10日	「感化事業発展の好機運」、「東京感化院統計表(自明治18年10月7日、至明治40年12月31日)」
63	131	1908 (明治41) 年5月10日	「東京感化院案内」
64	132	1908 (明治41) 年7月10日	楓堂「感化院の設立に就て」、「感化教育の一手段」
65			
66	133	1908 (明治41) 年11月10日	高瀬紹卿「家庭小話」、院生「秋季大祭及余興の記」

『東京感化院月報』一覧 (灰色部分は欠号)

号数	史料番号	発行日	内容抄録
1	79	1899 (明治32) 年4月25日	高瀬真卿「本院事業の前途に就て」「家族対陣運動を見る」、餅原桂村「院長と安養の会話」
2			
3	80	1901 (明治34) 年5月25日	孤舟生「教育界小言」(寄書)、常磐生「随記(一)」(寄書)
4	81	1901 (明治34) 年7月25日	楓堂「教育学上より見たる感化事業」、「地方感化院のことに就て」、「本院の農林部」、「退院生の書簡」、「農林部日誌」
5	82	1901 (明治34) 年8月25日	「公共遊戯場」
6	83	1901 (明治34) 年9月25日	高瀬真卿「実験場の家庭」、半山女史「謹て教を請ふ」
7, 8			
9	84	1902 (明治35) 年2月25日	「地方感化事業」
10	85	1902 (明治35) 年4月25日	「感化機関に就て」、「神奈川の県立感化院」、「某感化院主義者の演説に就て」、菅真道「天賜苑の花を見て」、「園遊会の記」
11	86	1902 (明治35) 年5月25日	高瀬紹卿「地方感化院」、「千葉感化院の移転に就て」、「和歌山県下感化保護院に就て」
12, 13			
14	87	1902 (明治35) 年9月25日	「感化事業と教育事業」
15	88	1902 (明治35) 年10月25日	高瀬紹卿「感化教育(一)」
16, 17			
18	89	1903 (明治36) 年10月25日	「府県立感化院の嚆矢」、「地方新聞の無責任」、「東京感化院統計表(35年12月調査)」、「東京感化院退院生報告(35年12月調)」
19	90	1903 (明治36) 年3月25日	「東京感化院統計表(35年12月調)」、「東京感化院退院生報告(前承)」(35年12月調)、鴨川生「家族生と院生」(寄書)
20	91	1903 (明治36) 年4月25日	「東京感化院退院生報告(前承)」(35年12月調)「園遊会の記」
21	92	1903 (明治36) 年5月25日	高瀬紹卿「家庭教育と感化教育」、「東京感化院退院生報告(前承)」(35年12月調)
22	93	1903 (明治36) 年6月25日	高瀬紹卿「家庭教育と感化教育(前承)」、清水橋村「家庭と女子」、楓堂「教育家の猛省を促す」
23	94	1903 (明治36) 年7月25日	清水橋村「夏の家庭二題」、楓堂「教育家の猛省を促す(続)」
24	95	1903 (明治36) 年8月25日	高瀬紹卿「地方感化院の困頓記」、楓堂「教育家の猛省を促す(続)」、月報愛読生「「ライオン」函磨の慈善寄付」
25	96	1903 (明治36) 年9月25日	高瀬真卿「母親の心得」、美蓉亭主人「皇門の四天王」、「和歌山感化保護院」、「備作感化院」
26	97	1903 (明治36) 年10月25日	「靴墨大改良広告」、楓堂「地方の有心家に一言す」、清水橋村「自然のまゝ」、「川越分監を見る」
27	98	1903 (明治36) 年11月25日	「製造靴墨広告」、楓堂「川越分監を見る」
28	99	1903 (明治36) 年12月25日	「製造靴墨広告」、楓堂「川越分監を見る(続)」、清水橋村「貴紳と労働」
29			
30	100	1904 (明治37) 年2月10日	高瀬紹卿「神奈川県薫育院に就て」、「長崎感化院の現状」「長崎感化院現状に就て(再び)」「備作感化院現況」、「製造靴墨広告」
31	101	1904 (明治37) 年4月10日	高瀬紹卿「謹告」、中原朝香「家族寮焼失顛末」
32	102	1904 (明治37) 年5月10日	楓堂「偶感(事局と社会事業)」、「慈善家に望む」
33	103	1904 (明治37) 年6月10日	楓堂「川越分監の生徒統計書を見る」
34	104	1904 (明治37) 年8月10日	孝基「尺八を聴く」、黄昏「夏の自然」

ある。その主な内容は、前頁の一覧表を参照されたい。なお、以下の三項目については、ほぼ毎号にわたって掲載されているので記載を省略した。

① 院内行事、昇等・賞罰会の記録、試験の記録、「院務紀略」、「教務録事」、「庶務録事」

② 職員、院生の和歌

③ 寄付者氏名（もしくは団体名）ならびに金額、寄贈書籍・新聞・雑誌（毎号）

頁数は第一号（全一二頁）を除き、各号八頁より成る。編輯兼発行者は第一〜一八号までが高瀬紹卿、第一九号以降が岡西繁三郎である。

史料の状態は、我々の調査当時、全ての号が紐で一冊に綴じられた状態であった（iii 頁の写真参照）。また、用紙自体の劣化が進んでおり、焦げ茶色に変色しつつあるが、判読に支障をきたすほどではない。なお、第一号はセロテープで補修されており、その部分の変色はより進んだ状態にある。

なお、本誌には誤植がきわめて多く見られるため、翻刻の際に明白な誤植については断らずに訂正したことを諒とされたい。ただし、号称を含む固有名詞の誤りについては、正否が不明な場合も多いため、誤植の可能性が高くともそのまま掲載した箇所も多い。

（当研究所専任研究員）

## 註

- (1) 『東京感化院雑記』第一号、一七頁の「大博士アップール先生演説」の「感化志叢第二号より続く」という記述による。  
 (2) 『東京感化院関係史料集(3)』（長谷川仏教文化研究所年報 第三二号別冊）、二〇〇七年七月、v～ix 頁。